

## 江戸幕府の医療制度に関する史料（七）

— 鍼科医員上田・吉田・山本・畠山家

『官医家譜』 —

香 取 俊 光

前回到引き続き東京大学史料編纂所所蔵の『官医家譜』（請求番号二〇六五—六）より、今回は江戸幕府鍼科医員登用以前の経歴が多彩な四家の系譜を紹介する。

翻刻に際して、常用漢字に直したが、次に掲げた変体仮名はそのままだした。

江へ、而て、者一は、茂一も、与一と、あ一より

また、史料中に尊敬の意味をもったマス明け（闕字）、文章の途中から文頭に改行する平出や他の行頭より飛び出る擡頭はマス明けしてその行間に（ ）として注を付した。

文中の（ ）は筆者が『新訂寛政重修諸家譜』（全二十二冊、続群書類従完成会。以後『諸家譜』と略す）・『徳川諸家系譜』（第一、続群書類従完成会、一九八二年）等で補足したので、系譜以外の事跡は拙稿「江戸幕府における鍼科と盲人の鍼科登用に関する研究」（長尾榮一教授退官記念論文集『鍼灸按摩史論考』、一〜一四六頁、桜雲会、一九九四年）を参照されたい。

最初に紹介する「上田家系譜」は、『官医家譜』十に所収されており、『諸家譜』第二十（三七一頁）と比べると母・妻・兄弟姉妹・法名等の記載はないが、次の二点が詳しい。

附属した方々の名前  
上田家の出自が京都において儒医であった。

上田家初代の施針庵東曆は、京都妙心寺の禅僧から鍼医という変わった出自で幕府に登用され、子孫も幕末まで鍼科医員を勤めた。

橘姓

常憲院殿（徳川綱吉）御代

上田

家紋 下り藤十文字  
三亀甲

高式百儀式拾人扶持

京都儒医上田元亮某惣領

施針庵東曆

某

始京都妙心寺出家（而のち鍼治の医を学び）江府（江戸）ニ出  
数年針術を施せしを 常憲院殿（徳川綱吉）聞召及ばれ

元禄十六年六月十八日被召出式拾人扶持（月俸二十口）被下  
寺社奉行支配（而）桂昌院殿（玉、本庄氏、徳川家光側室、  
綱吉生母）鶴姫君（徳川綱吉女、紀伊綱教室）之御用

を勤御成之供奉（徒行）（宝永二年十一月九日請う旨により法衣の下に宮袴・帶劔を許され寄合に列す）宝永五年松平壱岐守宅江渡御之時加秩式百儀被下庵号を被免寄合正徳元年八月

十九日死（法名東曆）牛込松源寺ニ葬

実上田元亮二男 後 東曆 （兄の養子）

元休

隆堅

正徳元年十月（二十七日）家督小普請元文元年十一月七日死（七十一才、法名崇之）同寺ニ葬（妻石丸与五左衛門正広女）

東学 （母正広女）

木子

元文元年十二月「日不知」（二十九日）家督小普請同五年八月十一日死四十三歳（法名了心）同寺ニ葬（妻石丸猪右衛門有証養女）

（勝昌）

初

東曆 勝五郎 （母有証養女）

貞休

元文元年十一月二日家督小普請（時に十一才）宝曆十一年正月十二日死二十五（三十二）歳（法名道固）同寺ニ葬

（某）

（某）

（女子）

（貞刻）

実木子四男

東曆 初 寅之助 （母有証養女）

貞刻

宝曆十一年四月三日養子家督小普請天明五年四月八日死四十六歳（法名智伝）同寺ニ葬（妻石河勘之丞勝昌女）

（女子）

（某）

（女子）

東曆 初 松助 （母勝昌女）

貞之

天明五年七月廿七（四）日家督小普請（十八才、妻喜多村安

貞直方女

（女子）

（女子）

次に紹介する『吉田家系譜』は、『官医家譜』六に所収されておき、『諸家譜』第二十二（一〇八〜九頁）に比べると、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事は見えないが、若干経歴に詳しい部分がある。特に初代兼則について『諸家譜』はほとんど記事がないし葬地も不明だが、『官医家譜』によって葬地が子孫と同じ本所延命寺であり、そして細かい経歴が判明する。

吉田家は、初代兼則が町医より召し出され、桜田の館の徳川綱重・家宣に仕え、二代目不先が家宣の將軍就任に際して幕府に登用され、子孫も幕末まで鍼科医員を勤めた。

藤原姓

吉田

家紋 丸之内三ツ柏

高式拾人扶持

先祖不詳

兼則

吉田秀清

(鍼治の医を業とし) 寛文十年九月廿一日桜田御殿へ被召出  
同廿三日 清揚院殿(徳川綱重、家光子、家宣父)へ拝  
謁し 文昭院殿(徳川家宣、御部屋之方(お喜世の方、勝  
田著邑女、月光院殿、徳川家継母)へ附られ奥医師同十一年十  
月廿六日月俸を給廿人扶持天和三年死本所中郷延命寺に葬

不先

吉田秀庵 (母某氏女)

天和三年十二月十五日於桜田御殿家督貞享二年二月桜田御  
殿医師同二年正月より表御番同月十日(徳川綱吉に)初見元  
禄十四年四月十二日御番御免寄合宝永元年十二月五日  
文昭院殿西丸へ入らせ給ひし後同十七日若年寄支配  
(月俸二十口、寄合医) 享保五年五月十三日 天英院殿

(照姫、近衛基熙女、徳川家宣側室) 御附また 竹姫君(清  
閑寺熙定女、浄岸院殿、徳川綱吉養女、島津繼豊室) 附之女房  
等之治療之事を奉らる同年六月十四日 蓮浄院殿(お  
すめの方、園池公屋女、櫛笥隆賀養女、徳川家宣側室) 御広敷  
廻り同八月十七日 法心院殿(おこんの方、太田政資姉、  
徳川家宣側室) 御広敷廻り同月廿七日 寿光院殿(大典  
侍局、清閑寺熙房女、徳川綱吉側室) 御広敷廻り同年十二月廿  
五日官料百俵享保六年四月廿六日 浄岸院殿診脈同年  
七月廿日 天英院殿診脈同年十一月十九日 月光院  
殿診脈同七年十一月七日西丸宿直を命ぜられ同七月六日  
免るさる享保廿年十月十三日老て致仕す褒金二枚を給元文  
元年六月四日死七十一歳(法名秀菴) 同寺二葬(妻横山氏養女)

(光覚)  
(知芳)

吉田秀和 仁庵 (母横山氏養女)

常備

享保八年二月九日(徳川吉宗に)初見同廿年十月十三日家督  
同日 天英院殿御附官料父之ことく給はる元文元年六  
月 浄岸院殿御広敷廻り同三年七月晦日 蓮浄院  
殿御広敷廻り同五年九月廿一日 法心院殿之診脈及び  
御広敷廻り寛宝(寛保)元年四月十九日(天英院殿薨御につ  
き) 寄合医師延享四年三月十二日奥御用同十五日(徳川家  
重) 御脈を診すへくと命せられ宿直し料百俵を給ふ同月十

八日御広敷廻り宝曆元年十二月廿六日(テツジ) 蓮淨院殿診脈  
 同三年七月廿三日 淨院殿診脈同十年五月十三日二  
 丸(安祥院殿) 左京局、三浦義周女、徳川家重側室、清水重好生  
 母) 勤同十一年八月(徳川家重薨御につき) 一統寄合明和元  
 年十一月十六日致仕同二年九月十二日死六十三(五) 歳(法  
 名秀和) 同寺ニ葬(妻某氏女)

(常正)

吉田秀庵 元東 (母某氏女)

(つねとも)  
常知

延享元年九月十八日(徳川吉宗に) 初見宝曆十一年御広敷廻  
 り同十二年閏四月六日 蓮淨院殿診脈及ひ同じ方之女  
 房の薬事を奉る明和元年十一月十六日家督(小普請) 同年閏  
 十二月十一日寄合明和二年三月十一日(テツジ) 法心院殿  
(タイトウ) 淨院殿診脈天明四年七月十二日死五十三(八) 歳  
(法名秀菴) 同寺ニ葬(妻某氏女)  
(女子)

吉田三喜藏 後秀和 (母某氏女)

(つねなが)  
常長

高二十人扶持

(天明四年十月六日家督七才)

次に紹介する「山本家系譜」は『宮医家譜』十一に所収さ  
 れており、『諸家譜』第二十一(三四三〜四頁)の方が、母・

妻・兄弟姉妹・法名・系譜等の詳しい記事がある。

山本家は、初代道照が上賀茂神職からの登用という変わつ  
 た出自で、子孫は五代目道皓(みちあき)の時に甲府勤番医となり甲府に  
 移り住み、幕末まで同地にて医員を勤めた。

藤原姓

大猷院殿(徳川家光) 御代

山本

家紋 梶之葉 五七桐

高式百俵拾人扶持

上賀茂神職山本民部尉惣領(加藤氏後藤原氏に改む)

友仙法眼 民部之丞

(みらてる)  
道照

(つじたか)  
氏誉

慶安三年十月朔日御側御鍼医師延宝五年二月(テツジ) 東福門  
 院(徳川秀忠女和子) 御違例ニ付京都江被遣奉窺御容体御鍼治  
 奉差上御全快ニ付同年七月廿五日於京都直叙之法眼被 仰  
 付御細工之御香箱其外品々拝領 常憲院殿(徳川綱吉)  
 御代年号不相知大奥女中療治被 仰付天和三年六月五日死  
 七十五歳(法名道照) 三田寺町正学院江葬(妻加茂神職芝式部  
 清雄女)

(某)

友仙 (母某氏女)

道榮(みちよし)

延宝五年二月廿一日(徳川家綱に)初見(十六才)天和三年(七月晦日)家督貞享元年八月二十六日)大奥三之丸女中療治被仰付元禄六(二)年六月五日御側御鍼医被仰付同十二年四月廿七日死三十八歳(法名一崇)同寺<sub>二</sub>葬(妻平田道有某女)

友仙 (母道有某女)

道賢(みちかた)

元禄十二年七月九日家督小普請(十才)正徳五年四月廿一日死二十六歳(法名一空)同寺<sub>二</sub>葬

(女子)

松平阿波守家来医師

実秋岡見節某次男

友仙 仙庵 (母某氏女)

道皓(みちあきら)

正徳五年六月廿六日養子家督小普請(同十二月十五日徳川家繼に初見)享保九年八月十三日甲府勤番医師(これより甲府に移り住む)同九年廿八日御暇宝暦七年八(九)月廿六日死六拾五歳(法名秀徹)甲府(東光寺村)能成寺<sub>二</sub>葬(妻道賢養女)

(女子)

実太田亮正(新十郎)林寛五男

仙庵

十之丞

俗名新十郎

(母某氏)

女

道暢(みちのぶ)

宝暦七年九月十二日養子同年十二月三日家督甲府勤番医師(二十二才)明和元年七月朔日参上(徳川家治に)御目見寛政八年十二月三(三十)日家業不出精<sub>二</sub>付差控同九年正月六日御免(妻藤沢弥七郎次保女、後妻布施物左衛門正重女)

(友仙 式部 母次保女)

道重(みちしげ)

(妻大橋左兵衛茂休女)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(女子)

(式部 母茂休女)

(道盛)

(女子)

最後に紹介する「畠山家系譜」は、『官医家譜』三に所収されておおり、他に紹介した『官医家譜』や『諸家譜』第二十二(二)

六七〜八頁)と比べても、家伝や経歴の記載が詳しい。

畠山家は、初代常信が酒井忠孝・忠相(諸家譜第二、八〜一〇頁)に仕え、藩医から幕府に登用され、子孫も幕末まで鍼科医員を勤めた。

平姓

畠山

(家紋 鶴丸 丸に二引)

平姓上総介良兼後胤秩父将垣五代秩父太郎重弘苗胤師岡衛門尉重經朝家降誕之時為鳴弦其先師岡八郎常綱儀鎌倉公方持氏三仕永享年中持氏鎌倉没落之時八郎常綱儀美濃江引退申候右以来師岡五郎左衛門迄数代濃州ニ蟄居仕罷在候師岡父子土岐大膳亮ニ相属安後年土岐家江羈食仕罷在候依之師岡父子土岐大膳亮ニ相属常州江戸崎在城仕候且江戸崎ニ而大野師岡佐野増尾申候四人之内ニ御座候右師岡源兵衛常安次男畠山権左衛門常久常州(常陸国)信太ニ住居仕罷在候其後江戸江出府仕処士ニ而罷在候且師岡者秩父家之庶流申儀ニ而権左衛門常久以来畠山ヲ以照合而候

常久惣領

畠山玉隆

始 辰之助

(つねのぶ) 常信

母 不知

松平豊後守家来

妻 高橋宇大夫某女

医業仕罷在正徳年中酒井勘解由(忠孝)以来同雅楽頭(忠相)

医師宝永年中御目見願享保十九年四月廿八日(徳川吉宗に御目見元文元年五月一八日西丸江被召 惇信院様(徳川家重)窺被仰付御鍼指上以来数度御用同年十月四日御切米百俵五人扶持(召出、医師)翌五日 惇信院様(西城)御附同二年正月十六日病死七十二(六十)才(法名祐山)四ッ谷笹寺長善寺江葬 右玉隆先祖方持伝候伯耆守安綱之刀所持仕段達 上聞内々ニ而笹本鞆負ヲ奉備上覽候尤此段申伝ニ而候年号月日不知右刀ハ今ニ所持

(女子)

(某)

(某)

初

畠山隆川 重三郎

(つねおき) 常赴

母 高橋宇大夫某女

松平大学頭医師

妻 明石通本直道女

元文二年四月二日家督小普請同三年十二月四日 天英

院様(照姫、近衛基熙女、徳川家宣側室)御附御番料百俵御逝

去ニ付御寛保元年四月十九日同三年 蓮浄院殿(おすめ

の方、園池公屋女、櫛笥隆實養女、徳川家宣側室)御病用之節

罷越候様被仰付浜御殿罷出 蓮浄院殿御鍼被 仰付数

度御鍼差上同年閏十二月朔日右衛門督殿御出入天明六年六

月廿五日死七十二（法名隆川） 葬地同寺

(女子)

(有性)  
常則

畠山郷八

一ツ橋（刑部卿宗尹） 御殿天番召出さる

女子二人

松平（前田） 加賀守家来

大音主馬某妻

畠山大十郎

常栄  
早世

(女子)

(女子) 幡野市十郎春光妻)

畠山玉隆

常邦  
高百俵五人扶持

母 明石通本直道女

(天明六年九月四日家督十九才)

参考文献・注

(1) 上田東曆については、小川春興『本朝鍼灸医人伝』（七三頁、半田屋、一九三三年）で紹介してある。

(2) 吉田家については、小川前掲書で不先（四八頁）を、『官医家譜』を使い常備（四九〜五〇頁）・常知（五〇頁）を触れている。

(3) 山本家については、小川前掲書で道照（五九〜六〇頁）・道栄（六〇頁）・道賢（六〇頁）に触れている。

(4) 小川前掲書では、『官医家譜』を使い畠山常信（五六頁）・常赴（五九頁）を紹介している。

（群馬県立盲学校教諭）